赤土の森で出会った孤高の巨木たち

赤い土と緑の葉っぱ

カメルーンは、アフリカ諸国の中では小さめな国土の中に、ステップ気候、サバナ気候、熱帯雨林気候と、北から南にかけて幅広い気候帯をもつことから、「アフリカの縮図」という異名をもつ国である。国旗のトリコロールは、森（緑）、太陽（黄色）、統一（赤）の象徴だというが、赤だけは意外だった。この国を訪れてまず目に飛び込んでくる鮮やかな赤は、大地の色だったからだ。

カメルーンの赤土は粘土質なのに柔らかいため、植物がしっかりと根を張りやすい。この根を通して、植物たちは成長に必要な養分のほとんどを土から受け取っている。しかし、カメルーンの赤土は養分がひどく乏しいため、植物たちは自ら吸い上げた養分をとても大事にする。彼らは、地表付近に細かい根を張り巡らせることで、一度は落葉・落枝（リター）として手放した養分を効率よく回収している。この“自給自足”とも言える養分サイクルの実態を詳しく知るために、赤土の森に、リター捕集装置（リタートラップ）と、土壌水中の養分をトラップするイオン吸着樹脂を仕掛けたのが、2009 年 1 月のことだった。調査地は東部州の南東部、中央アフリカ共和国およびコンゴとの国境付近にあり、この地域では、バントゥー系農耕民族バクエレと、狩猟採取民バカ・ピグミーが熱帯雨林資源を共有しながら、隣り合って暮らしていた。彼らの社会構造や生態系とのかかわり等を研究するために精力的に調査を行っていた、京都大学アフリカ研究センター（アフ研）の皆さまには、渡航準備から現地滞在まで大変お世話になった。

写真①カメルーンの赤土

いざ調査地へ

同年 5 月には捕集したリターを回収するため、再渡航を行った。初めての単独渡航だが、仏語堪能な戸田美佳子さんが現地合流してくれるのが心強い。当時アフ研の大学院生であった戸田さんは、アフリカでの障がい者の生活基盤を研究するためにカメルーンに長期滞在していた。首都ヤウンデから目的地の Ndongo 村までの直線距離はおよそ 700km。日本の高速道路であれば 1 日ですむ距離だが、4 日を費やした。当時のカメルーンではアスファルトの舗装道路が珍しかった。ましてや、この時期のカメルーンは雨季の真っ只中。赤土がむき出しの道路は雨を吸うほど粘り気を増し、伐採木を運び去る大型トラックが走るほど無残に削られていく。やがて、赤い大きな水たまりが道のあちこちに出現し、これに足を取られた巨大な材木トラックが数台、派手に横転していた。『スピードだし過ぎるからだよ！』トラックに積まれていた直径 100 ㎝を超える巨木が道路上に横倒しになると、我々だけでは動かすことができない。周辺に住む村人 10 名ほどで車が通れるスペースを作ってくれたので、1000 フラン（日本円で約 200 円）のお礼を渡す。通過後、何とは無く後ろを振り返ると、空けたはずのスペースを、よいしょよいしょと再び塞ぐ村人の姿。なるほど！臨時収入のチャンスを逃さぬたくましさに感心する。

運転手のパトリスは、この悪路にうまく対処してくれたが歩みは遅く、調査地の 1 つ Mondindim 村に着いた頃には首都ヤウンデを出てから 2 日半経過していた。一旦この村を素通りし、もう 1 日半かけてさらに奥地にあるもう一つの調査地 Ndongo 村に向かう。リターの回収をお願いしているチャーリー氏宅に滞在させてもらう。彼はリターを月毎に回収し大切に保管してくれていた。僕がいない間も誠実に対応してくれているのが有難い。後はイオン交換樹脂を掘り起こせば万事 OK だ。チャーリーの奥さんが作ってくれたクスクスを食べ、蚊帳付きのベッドで眠る。どうかハマダラ蚊に刺されませんように・・・。この奥地で熱帯熱マラリアに感染したら大変だ。

シロアリの恐怖

一泊し、翌朝樹脂回収に向かう。森の中にはバカ・ピグミーが仕掛けた罠や、マッシュルームのようなシロアリヅカなどがあり、見ていて飽きない。1 時間ほど歩いたところで調査地点に到着する。早速樹脂を掘り起こしてみると、おかしい、何かの動く気配が･･･。『オー、なんてこった！！』樹脂バッグの中にシロアリが侵入し、巣をつくっていた！！バッグに空いた穴から、わらわらとシロアリが湧き出してくる。『まさか Mondindim も・・・？』焦る気持ちを抑えながらチャーリー

たちにお別れを告げ、来た道を戻る。Mondindim村に着くとすぐ調査地点に向かい、樹脂バッグを掘り起こすと、こちらでも見事なシロアリの巣が出来上がっていた。なるほど、バッグを埋めるために一度掘り返しているから、シロアリは移動しやすいのか。土が所々に硬化して黒くなっているのはシロアリが巣作りのために何か分泌しているのかな。観察してみるとなかなか面白いぞ・・・いや違う！そうじゃない！この研究はリターの情報と樹脂の情報の 2 つが揃って初めて意味のあるものになる。終わった・・・。

写真②シロアリが巣作りした樹脂バックの残骸

ケセラセラだよ人生は

Mondindim 村で聞き取り調査を続ける戸田さんを村に残し、パトリスと 2 人首都ヤウンデに戻る。無事回収できたリターと、シロアリに食い破られた樹脂の残骸を持って。心も体も疲れ果て何もする気が起きないが、腹は減る。ホテルの近くで一番美味しい中華料理屋に行き、麻婆豆腐とカシューナッツ炒めでお腹を満足させたあと、ふと今後の人生に思いを馳せる。・・・指導教官がポスドクとして雇ってくれている間に、新しい職を見つけなければ・・・。

そのためにはカメルーンの研究で成果を出さねば・・・。それなのに、実験の肝である樹脂は全滅・・・。将来への不安が急に押し寄せてきた。

そんな時、絶妙なタイミングで、「Que sera, sera～♪Whatever will be, will be～♪（なるようになるわよ。だから心配しないで)」とドリス・デイの美しい歌声が店内に響いた。日本で聴いた時には特に感情が動かなかったが、その時は魂が震えるほど感動した。心に力が戻ってくるのを実感する。そうだ、実験が失敗したということは、ある意味僕は自由だ！帰国までにカメルーンでできることを思いっきり楽しもう。

写真③回収したリター。右端が“天狗の団扇”

ホテルに戻り、まずは回収した葉っぱをベランダに並べ観察してみる。1 月、2 月、3 月・・・細長い葉、丸くて大きな葉、みんな違ってみんな良いではないか。一通り観察する中で、ひときわ特徴的な葉の存在に気付く。鞍馬天狗が持つ団扇のような形をしたその葉は、ほぼ全ての回収袋に入っていて、枚数も明らかに一番多かった。『この葉はどんな木から落ちてきたんだろう・・？』これまでは、集めた葉を実験室で溶かして養分量を調べることだけを考えていたが、段々と森の木そのものに興味が湧いてきた。

その日の夜、ヤウンデ大学で植物学を学ぶエバリスト氏とアポを取り、回収した葉っぱを見てもらう。すると、「これ（天狗の団扇）はアヨウスの葉だよ。カメルーンの熱帯雨林では割と一般的。他の葉は～」とほぼ全ての樹木を言い当ててくれるではないか。アヨウスとはどんな木なのか、彼と森に入り、植生調査をすると面白そうだぞ。その場の勢いに任せて誘ってみると、何と快く OK してくれた。よし行くぞ～！

再び赤土の森へ！

再び 2 日半かけて Mondindim 村に戻る。村で調査を続けていた戸田さんには「何で戻ってきたの！？」と驚かれた。この村でリター回収をお願いしているアブドゥル氏宅に泊めてもらった翌日、さっそく調査地周辺で、植生調査を開始する。GPS で位置を確認しながら 40 メートル×40 メートルの正方形の内側にある樹木の名前と胸の高さの直径（胸高直径）を調べていく。エバリスト氏は、「この木は幹の内側が赤い、この木は樹液が白くて粘性が高い、だから～」と、樹木の見分け方も

教えてくれるので勉強になる。調査の結果、40 メートル×40 メートルの内側にあった樹木の数は全部で 82 本。胸高直径は平均で 29.6±31.6 cm、最小 7 cmから最大 200 cm まで実に幅広い。まず驚いたのは、その種類の豊富さだ。植物種は全 40 種類（分類不明の 3 本含む）で、1 本だけの植物が 16 種もあった。今更ながら熱帯雨林の多様性を実感する。

この 40 種の中で、特に印象に残ったのは 2 つの樹種であった。1 つ目は、本数が 8 本と最も多かったマカランガ（別名パラソルツリー）だ。マカランガは、パイオニア種の一種で、倒木などで生じた林間ギャップで固まって急成長し、樹冠を広げるスペースを確保する。急成長の代償として木質が柔らかいため、20 年ほどで倒伏してしまう。そのせいか、マカランガの胸高直径は平均 20 cm とかなり小さめだった。ウサギとカメの童謡でいえば、この木はウサギだな・・・。もう 1 つは、本数は 3 本と少なめだが、他の樹種と比べて飛び抜けて大きい。人の背丈を超える板根が発達しているため、胸高直径はもはや実測不能、目視でおよそ 200 cm と検討を付けた。これが、天狗の団扇の持ち主、アヨウスだった。巨木とはいえ、たった 3 本！？落ち葉の数は木の数を表さない。高木層を形成する巨木たちが森の養分循環を支える大きな柱となっているのか！土ばかり見ていた不器用な人間が、回りくどい方法で熱帯雨林の階層構造を実感した瞬間だった。アヨウスもパイオニア種に分類されるため、かつては複数が固まって成長したはずだ。しかし、50 年以上は生きているだろう 3 本のアヨウスたちは、赤土の森で孤高の存在感を放っていた。

孤高の巨木が訴えるもの

今、アヨウスは絶滅の危機にある。輸出用材木として好まれ、伐採圧が加速しているのだ。思えばあの横転したトラックがぶちまけた巨木たちも、アヨウスだったのかもしれない。救いは、村人がアヨウスの伐採を望まないことだ。商品作物カカオが必要とする日陰を作るために貴重なため、焼畑の際にも敢えて伐り残している。しかし、日陰を必要としない新品種のカカオ栽培が東部州の州都ベルトゥアでは普及しつつあり、これが村まで波及すると、もはや伐り残すインセンティブも無くなってしまう。そうなれば、アヨウスの伐採は更に加速するだろう。この木を守りたい。いつか、アヨウスが生態系にとってどれだけ重要なのか、それを明らかにするような研究がしたいと強く思った。この思いを忘れぬよう、現職に就く際にメールアドレスにアヨウスの学名 triplochiton を刻んだ。不必要に長いメールアドレスと不評を買いながらも、使い続けている。

中尾淳（なかおあつし）